

東京・春・音楽祭 2021

イタリアン・オペラ・アカデミー in 東京 vol.2



リッカルド・ムーティ指揮《マクベス》(演奏会形式/字幕付)

曲目解説

歌劇《マクベス》

第1幕

マクベスとバンコが荒れ狂う雷雨の中、戦場からの凱旋途中、魔女たちに遭遇する。魔女たちは、マクベスがコーダーの領主となり、やがて国王となると予言し、一方、バンコは王の父となるお方と予言し姿を消す。そこへ現国王ダンカンの使者が到着し、マクベスがコーダーの領主に命じられたことを告げる。マクベスとバンコは魔女たちの予言の一部が成就したことに驚愕し、帰途につく。

夜、マクベスの居城では夫人がマクベスからの手紙を読んでいる。手紙には、戦場からの帰路、魔女たちと遭遇し、自分がコーダーの領主となり、やがては王になると予言され、実際にダンカン王の伝令が到着し、自分がコーダーの領主になり、第一の予言が的中したことが記されている。マクベス夫人は手紙を読み終わると、魔女の第二の予言が実現されることを強く願う。頃良く従者が、国王ダンカンが急務で今晚この城を訪問することになったと告げる。思わぬ好機到来に夫人は狂喜し、マクベスが帰ってくると、野望を実現させるべく闘志を燃やし、躊躇するマクベスを急きたてると、彼も国王殺害に同意する。

国王歓迎の祝宴が終わり、王は賓客用の寝室へ入る。マクベスは国王殺害の幻影に錯乱するが、国王を殺し、茫然として寝室から戻って来る。夫人は血塗れの剣を取り上げ、恐怖と動揺に震えるマクベスを叱咤し、眠り込んでいる国王の従者のかたわらにその剣を置き、隠蔽を図る。翌朝、バンコとマクダフが暗殺されたダンカン王の遺骸を発見する。一同、暗殺犯に神罰が下されることを強く願う。マクベスと夫人も何食わぬ顔をしてその場に居合わせ、皆と共に復讐を誓う。

第2幕

国王ダンカンの息子マルコムはイングランドに逃亡する。マクベスはスコットランド王となったが、バンコが王の父となるという魔女たちの予言を恐れている。夫人の「邪魔者はすべて消すのだ」という言葉に触発され、マクベスはバンコと息子の殺害を決意し、刺客を送る。城外を散策中に襲撃されたバンコは自分が犠牲になり、息子フリーアンスを逃亡させる。

居城ではマクベス国王即位の祝宴がたけなわである。マクベス夫人が招待客

をもてなして乾杯の音頭をとり、宴席を盛り上げているが、戻ってきた刺客からバンコ殺害が報告されると、マクベスはバンコの亡霊に動揺して錯乱し、やがて半狂乱に。参列者の不審がつの中、晩餐会は中断される。繰り返される夫人の乾杯も空虚なものとなり、人々はマクベスの悪事を見抜く。亡霊の復讐を恐れるマクベスは再度、魔女たちのもとを訪れることを決意する。

第3幕

雷鳴と稲妻の中、魔女たちが煮えたぎった大釜にトリカブトや猿の血などを投げ込み、奇妙な言葉を唱えながら不気味な薬を作っているところに、マクベスが再び現れ、助言を求める。魔女たちは、マクダフには警戒をおこたらないこと、女から生まれ落ちた者にはマクベスを倒すことができないこと、バーナムの森が動き出さない限り、戦に敗北することはないと新たに予言する。しかし、気がかりなのは、バンコが王の父になるというかつての予言。問い質すと、魔女たちは歴代の八人の王の亡霊を地下から次々と出現させる。その最後にバンコが現れると、マクベスは恐怖の余り気絶する。夫人にこの奇妙な幻影のことを語ると、今こそ雌雄を決す時であると、マクダフとバンコの息子殺害を決意する。

第4幕

マクベスの圧政を訴える亡命者たちが、スコットランドとイングランド国境近くの荒野に集結している。マクダフは妻子を惨殺された悲しみを述べる。そこにマクベス王への反乱を計画しているマルコムがイングランドの軍勢を率いて現れる。マクダフはマルコムとともに復讐を誓い、兵士たちにバーナムの森の木で擬装するように命令する。

マクベスの居城では、夢遊病者となった夫人が毎夜、城内を徘徊し、手に付いた血を洗い流す仕種を繰り返している。まだここに血痕が残っていると呟く放心状態のマクベス夫人の行動と言葉に、医師と侍女は恐れおののく。一方、マクベスはマルコムとその一派が反乱を起こしたことに激怒し、反撃を命じるが、バーナムの森が動き出したという続報に、自ら戦場に赴く。バーナムの森が動き出さない限り、王位は安泰との魔女たちの予言があったからだ。マクベスとマルコムの軍勢が戦闘を繰り広げ、やがて一騎討ちとなる。マクベスは、自分は女の産道を通して産まれた者には殺されることはないという魔女たちの予言をマクダフに告げると、マクダフは、自分は女の腹を裂いて産まれたと高笑いしながら答える。マクダフが帝王切開によって産まれたことを知らされたマクベスは愕然とし、マクダフの剣に倒れ、マルコム軍が勝利を収める。マクベスの死により、マルコムが国王となることを讃える合唱が高らかに歌われ、圧政の終焉と勝利を祝福し、幕となる。